



創造する生徒 心豊かな生徒 鍛える生徒

藤花だより

令和5年度10月号
令和5年9月29日
さいたま市立大宮西中学校
TEL048(624)4339
<https://omiyanishi-j.saitama-city.ed.jp>

「おまけの気遣い・心遣い」

～「どっちでもいい」けど・・・本当に?～

校長 森角 由希子

私はいい年の大人になっても、よく母に小言を言われる。

まだ暑さが残る中、母に缶コーヒー6本セットの買い物を頼まれた。しかし、頼まれた「無糖」ではなく「微糖」を買ってきたことがきっかけで、ちょっとした言い合いになった。

間違えて買ってきてしまって申し訳ないと思いつつも「なぜ無糖でないのか」と母に問い詰められ、私：「(この缶コーヒーは、家族が飲むものではなく、他人様に個別にあげる代物であることを知っていたので)こちらの都合で勝手にお渡しさせていただくものなのだから、無糖でも、微糖でもどっちでもいいじゃない」と口答え。母：「うちに来る配達の人や、ごみ収集車に乗ってくる人は、ほとんど男の人。男の人は甘いのを好まないんだから、無糖じゃなきゃ!!」私：「(それこそ性差別である)作業して疲れているんだから、少しぐらい甘いものを飲みたい人もいるんじゃないの? (ちょっと反撃)」母：「こんな暑い中で、甘ったるいのを飲みたいとは思わないでしょう?」私：「(→微糖でも母にとっては「甘ったるい」らしい。だったら自分で買ってあげればいいのに・・・)と、『無糖』と『微糖』を間違えて買ってきてしまったことを棚に上げて、言い返したいところをぐっと堪え、心の中で唇をかんでいる」

私の母は、宅急便の配達員の方や、ごみの収集車に乗って作業をしている方に飲み物を渡している。(特に、ごみの収集車の方は動きが早く、母は、車の止まる音が聞こえた瞬間に冷蔵庫からコーヒーを取り出して飲み物を渡そうとしているのだが、昔は足の速かった母もさすがに追いつかず、車の後ろ姿を見送るパターンが多いようだ。)この行為は、あくまでも母の感謝の気持ちを伝えるためのアイテム(おまけ)と私はとらえているのだが、「無糖も微糖もそれなりにどちらでもいい」と思う私が、母には「相手に対する気遣いや心遣いが残念な人間」と映っていることだろう。確かに、「渡す相手が明確になっていないもの」に込める気遣いや心遣いの想像力は、母に及ばない。

そして、ものを選ぶにもセンスが問われる。選んだものそのものは、その人の「人となり」がイメージされるだろうから、缶コーヒー一つ選ぶのも容易ではない。(安易に『微糖』を買ってきたことをいまさらながら後悔するのだが)その一方で、私の経験から、「いただいた人は、その行為やその気持ちに触れただけで、幸せをおすそ分け(お福分け)してもらった気持ちになり、ものそれ自体に、大きな価値は求めないのではないか?」とも、勝手に思っている自分がある。

いずれにしても、ものを一つ選ぶという些細な行為は「相手を思う気持ちや想像力」が大切であり、「その行為が相手をあたたかな気持ちにすることもあり、心地よい人間関係をつくる」のであろうと、氷たっぷりの「微糖」コーヒーを飲みながら、ほっと一息ついた。

